

第49回日本麻酔科学会（福岡）

大下 修造*

2002年4月18日から20日までの3日間、九州大学大学院医学研究院麻酔・蘇生学教授、高橋成輔会長のもと、シーホーク・ホテル&リゾートと福岡ドームの2会場において第49回日本麻酔科学会が開催された。2会場は隣接しており、会場間の移動は容易であった。さらに、託児所が開設されていたのには感心した。麻酔科学会としては初めてのことでないだろうか。産科婦人科学会ではすでに男性医師よりも女性医師の方が多いということであるし、女性医師が増えてくるであろう麻酔科学会においても大切な配慮と思われる。

プログラムの最初に、高橋会長は、「(社)日本麻酔科学会として生まれ変わって最初の年次学術大会であり、会務の総理は花岡一雄理事長のもとに集約され、大会長は学術集会の企画・運営に専念することになった」が、「第49回大会は移行期にあり、従来型と将来型の中間型になった」と書いておられる。後でお聞きすると、従来型において大会長やその教室の医局員が苦勞してきた学会運営のための予算の獲得にはあまり苦勞されなかったとのことであった。また、総会で報告があったように、将来型においてはASAと同様、全国数カ所の都市に絞って学術大会を開催するのであれば、大会長は本当の意味で学術集会の企画・運営に専念できることになる。

第49回大会の印象を一言でいえば、非常に内容が豊富であったことと、市民参加型の学会であったことであろう。「新世紀序曲：急性期医学の立場から侵襲と生体の調和をはかる」というメッセージのもと、会員に「明日が見える元気の素」を届けることができる大会を目標とされ、特別講演、そのほか多くの招請講演、学術講演、シンポ

ジウム、パネルディスカッション、ワークショップが企画されていた。大会のメッセージといい、その目標といい、さすが高橋会長と感服させられた。

一方、一般演題に関しては、厳しい相互評価を目的として、演題を応募するときに自己評価を行い、その評価が査読者の評価と一致するかどうかを後で検証できるようにされたとのことである。私にも査読の依頼が来ていたが、それに気付くのが遅れ、返事が間に合わなかった。この場を借りてお詫びしたい。さらに、本大会で採用されたすべての演題が、しかるべき専門誌に掲載されたか否かを確認する予定とのことである。その方法の詳細は知らないが、良い試みではないかと思う。

会長講演は、「若き麻酔科医へのメッセージ」と題して講演された。巨大なスクリーンに映し出される映像に圧倒され、申し訳なくも会長が何を話されたのか全く記憶にないが、私自身は「ま、若くないからいいか」と変に納得している。

市民参加型の学会と感じたのは、従来の医科機械主体の展示企画に加え、「メデイトピア2002：安心と納得の医療を求めて」を愛称に、一般市民も参加できる「手術体験ワールド」など多くの公開展示を企画された点にある。「医療事故根絶大作戦～現代医療におけるリスクマネジメント戦略～」を目的として一般公開で開設し、現代医療の成果と限界を示しつつ、医学・医療のあり方について医療関係者と一般の方々と同じ目の高さで双方向に対話する機会を設けられた。救急・災害イベントでは、平和台球場跡地において、救急・災害時における「ドクターヘリ」、「消防・防災ヘリ」を使った医療活動の訓練を一般公開された。この併設企画は、2003年春に福岡で開催される第26回日本医学会総会の中で、高橋教授が委員長を

*徳島大学医学部麻酔学教室

務められる総会展示企画と連動させて計画を進められたとのことである。さらに、西日本新聞には、麻酔についてシリーズで記事を掲載され、麻酔におけるリスクマネジメント戦略について市民への啓発に努められていた。

また、「AEDの導入について」という緊急パネルディスカッションを予定されたのも、さすが高橋会長と感心させられた点の一つである。シカゴのO'Hare空港で実証されているように、心停止後できるだけ早期に（できれば3分以内）二相性波形によるAEDを施行すれば、救命率は約70%

にも達するとのことである。サッカーの世界カップを前に、日本でも先日（5月下旬）二相性波形によるAEDが認可された。

いずれにしても、第49回日本麻酔科学会は内容が豊富であった。これだけ内容が豊富だと、参加登録費18,000円は高くない。会員懇親会でおでんのコーナーに並んだけれどコンニャクしか残っていなかったことも、カレーのルーが間に合わなくて、茶色いご飯にらっきょと福神漬を大量に入れて、カレー風味の漬物ご飯を食べたのも、皆許せると思いつつ機上のヒトとなった。